

〈原著論文〉

『狭衣物語』粉河寺詣の吉野川と妹背山をめぐる： 吉野川と紀の川の境界

金 田 圭 弘*

Consideration of Yoshino River and Imoseyama at
Kokawa-dera Temple in 『Sagoromo Monogatari』：
The boundary between the Yoshino River and Kinokawa

(KANEDA Yoshihiro)

1. 『狭衣物語』の吉野川

『狭衣物語』巻2末で主人公の狭衣は、

物むつかしさも慰めがてら、弘法大師の御姿常に見たてまつりて、なほ、この世をもの
がれなん¹⁾

と、念願であった出家を果たそうとしていた。「弘法大師の御姿常に見たてまつりて」とあるが、弘法大師とは言わずと知れた真言宗の開祖空海のこと、弘仁7(816)年に嵯峨天皇より下賜された高野山で真言密教の根本道場を開き、延喜21(921)年に弘法大師の諡号を醍醐天皇から授けられたことは広く世に知られたことだが、文学作品に弘法大師の名が登場したのはおそらく『狭衣物語』が初めてなのかもしれない。その弘法大師が入定し、今も我々に救いの手をさしのべ続けている高野山へ狭衣が行けば、そのままその地で出家をしてしまうのではないかと、父の堀川大臣が心配したので、狭衣は、

音に聞く所をまだ見はべらねば、心地の例ならぬ慰めにもと思ひたまへらるるを
と、高野山への参拝はするが、「音に聞く」名所も観光をするということで堀川大臣を説得し承諾を得て、京を離れ紀伊国高野山へと旅立つ。

高野山は狭衣自身が出家しようと意気込んでいた場所であったにもかかわらず、狭衣が高野山で過ごす様子や弘法大師の祀られている奥院のことなどは全く語られることなく、紀伊国での狭衣のことは、

霜月の十日なれば、紅葉も散りはてて野山も見どころなく雪霰がちにてもの心細く、い

* 附属和歌山高等学校・中学校教諭

〔キーワード〕『狭衣物語』、『宇治関白高野山御参詣記』、紀の川、吉野川、妹背山

とど思ふこと積りぬべし。吉野川のわたり、舟をいとをかしきさまにてあまたさぶらはせ
たれば、乗りたまひて流れゆくに、岩波高く寄せかくれど、水際いたく凍りて浅瀬は舟も
行きやらず、棹さしわたるを見たまひて、

吉野川浅瀬白波たどりわび渡らぬ仲となりにしものを
思しよそふる事やあらん。妹背山のわたりは見やらるるに、なほ過ぎがたきに御心を汲む
にや、舟いでえ漕ぎやらず。

わきかえり氷の下にむせびつつさもわびさする吉野川かな
と、狭衣が既に高野山を下山したところから始められる。高野山を下りた狭衣は、「吉野川の
わたり」で舟に乗り、途中通過する「妹背山」を見ながら和歌を詠んで、粉河寺へと向かい、
物語の舞台は粉河寺へと移る。

さて、通常高野山を下って舟で粉河寺に行くのであれば、紀の川²⁾の中流域に粉河寺が位
置するので「紀の川」を下流に進んで行くことになると思われるのだが、新全集本が底本とし
ている深川本には紀の川上流の呼称である「吉野川」と記されている。念のため本文の異同に
ついて確認しておく、例えば旧東京教育大学国語国文研究室蔵本を底本にしている『新潮日
本古典集成』³⁾の本文や内閣文庫所蔵本を底本とした『日本古典文学大系』⁴⁾など他の本文に
異同は見られない。「吉野川のわたり」について新全集本では頭注を施しており、

道長の高野詣でにおいても、竜門寺に詣でた翌日「吉野川の末」で乗船し、午の時に高
野政所に到着、申の時に山中の仮屋に向い、翌日の夕刻、金剛峯寺に至っている(扶桑略
記)。狭衣の旅でも奈良を経て五條あたりから乗船、紀ノ川を高野口まで下ったものか。
とし、治安3(1023)年に高野山を参詣した藤原道長の行程を紹介している。注にある「政所」
とは、山本智教氏によると和歌山県伊都郡九度山町にある慈尊院のこと⁵⁾で、『和歌山県の地名
日本歴史地名大系31』は、「平安時代には高野山が山麓に設けた政所(家政機関)がこの
地にあり、のちに政所の中にあつた慈尊院をもってその総称とした。ために史料にでる慈尊院
は、寺院であると同時に政所の総称とされる場合がある。」⁶⁾と説明している。慈尊院が高野山
の政所であったことともう一つ付け加えておくべき点は、高野山に通じる七つの道である「高
野七口」と呼ばれる参道の一つで、そのメインストリートにもなっている町石道の起点になっ
ていることだ。新全集本頭注にある「高野口」とは、漠然と和歌山県橋本市高野口町のことを
指すのではなく政所である慈尊院のことをさすのだろう。新全集本ではこのような地理的状況
などによって「吉野川のわたり」の吉野川について「紀の川」として捉えているようだ。続く

「妹背山」にも新全集本頭注は、

妹背山は上流の吉野町にもあるが、ここは紀ノ川下流、伊都郡と那賀郡の境あたりの兩岸に対峙する山。右岸に背山、左岸に妹山がある。ここから、一行はすでに伊都郡の高野参詣を終えて那賀郡の粉河寺に向かっているとの説も生まれる。

と注釈を加えている。「説も生まれる。」としているのは、一本の川でありながら、大和と紀伊との国境で川の名称が変わり、さらに「妹背山」という同じ名前を持つ山がそれぞれの国のその「川」沿いにあるという複雑な事情から断定的な説明を避けたのだと思われ、「妹背山」の注は「吉野川のわたり」の「吉野川」について注釈したのと同じように明確な言い方をしなかったと思われる。いずれにしても新全集本では「説も生まれる」としながらも狭衣が高野山から「紀の川」を利用して粉河寺に向かったと判断している。

『狭衣物語』で狭衣が高野山下から粉河寺へと向かった「川」は、本文に「吉野川」となっているが、本来は「紀の川」のことであり、「妹背山」は紀伊国にある妹背山としてよさそうである。だがそれにしてもなぜわざわざ『狭衣物語』の作者は「紀の川」とせずに「吉野川」としたのであるか。

2. 『狭衣物語』と『宇治関白高野山御参詣記』

新全集本の「吉野川のわたり」の頭注では、治安3（1023）年の藤原道長の高野山詣と『狭衣物語』高野山詣との関連を指摘していたが、永承3（1048）年に道長の息子である頼通も高野山に参詣しており、その時の様子は同行した平範国が『宇治関白高野山御参詣記』として日記に書き残している。従来、『狭衣物語』「粉河寺詣」の場面との関連性やその影響について指摘がなされてはいたが近年頼通時代の文学が見直され、と同時に再び注目もされるようになった⁷⁾。そこで狭衣が頼通と同じルートで高野山から粉河寺に移動しているので、『宇治関白高野山御参詣記』と見比べながら、作者がなぜ「紀の川」とせずに「吉野川」としたのか。その意図について考えたい。

頼通は永承3（1048）年10月11日に京を出発し13日に高野政所に到着、14日に登山し高野山奥院に到着。16日に下山し、「子刻」に政所に到着。翌17日に、

十七日〔壬／午〕天晴、辰剋供御膳、所々饗饌了、令立宿給之間、国司艤華船於河辺、令候気色、殊有許容、忽以移御

〔御料一艘、編鶺船二艘、其上構御屋形、以綾屏幔為覆、以白蔦縷窠文冒額、簾用村濃、

緑竹高欄、舳左右雁鹵下引廻縫物紺布、御座障子等殊尽花美、棹差四人着赤色襖袴蘇芳袖、僧料一艘、同方組二艘、屋形葺紅葉、諸々大夫二艘、亦方二艘、葺蘆花、一艘、御隨身料]、

爰解錦纜而漸權、妹山熾山之紅葉浮元、卷珠簾而閑望、斜岸遠岸之青苔展茵、或有碧沢之湛々、或有白砂之漠々、奇巖恠石繞之參差、古松老杉亦以雜挿、凡每所無不驚眼、每物莫不発興、其西不経幾程、暫之止御船〔自岸辺迄于寺/大門十余町〕、更隴騶、^(参脱力)合粉河寺給⁸⁾、

と、国司が用意した「華船」に頼通は乗り粉河寺へと向かう。「於河辺」の「河」とは、「紀の川」のことで、狭衣もおそらく頼通と同じように政所前から乗船して粉河寺に向かったのであろう。

粉河寺へ到着する直前に「妹山熾山」とあるのは小倉久美子氏によると「妹背山」⁹⁾のことで、『狭衣物語』でも狭衣が粉河寺に着こうとする前に「妹背山」の景色を見て和歌を詠んでいた。また「妹山熾山之紅葉浮元」とあり、『狭衣物語』では紅葉は散ってしまったとしているものの、紅葉が共通の話題としてのぼっている。

他の共通する話題といえば、頼通が高野山を下山し、粉河寺に向かったのが10月17日で、狭衣が高野山を下山して粉河寺に向かおうとした日時は「霜月十日」と約一ヶ月程度の差があるものの、『宇治関白高野山御参詣記』の10月15日条に、「夜風雪、地牙水凍、泥水如鏡」、10月16日条にも、「雪行泥深」とあり、『狭衣物語』の「雪霰がちにて」とあったこととも寒さの厳しさを言い表しているという点では共通している。

頼通はしばらくの時間を粉河寺で過ごした後、再び乗船しその日の夕暮れ時には藤原長家の所領であった紀伊国の市に着き、そこで用意されていた御借屋に宿泊する。市の御借屋とは、10月13日に和泉国と紀伊国の境である雄ノ山を越えてきた頼通が紀伊国で最初に泊った施設で、17日には再びそこに戻ったのだった。その頼通が紀伊に入国した13日条に、

十三日〔戊/寅〕天晴。早旦令立御宿給。御膳并上達部殿上人儲所々饗屯食等如去夕、午尅着御紀伊国市御借屋〔民部卿所領辺〕、去袁嶽山之南卅許町、木御川之北、不経幾、占樹木蒙籠泉石幽奇之地、造立件御借屋。

と、市の御借屋が設けられた場所が示されている。「木御川」とは「紀の川」のこと¹⁰⁾で、頼通は紀の川を上ったり下ったりしていたことになる。18日にはその市の御借屋を出発し、

十八日〔癸/未〕天晴、卯尅供 御膳、所々饗饌了、^(合カ)合立御宿給之間、召国司定家賜御

馬一疋〔鶴毛〕、方棹花船、迄于木御川尻下給、是行路之便、為御覽吹上浜和歌浦也、已剋之終着御湊口。

と、紀の川河口にある吹上の浜や和歌の浦で観光し、笠道山を抜けて和泉国日根野で1泊し、20日の夜には帰京した。

一方狭衣は、頼通がその日のうちに粉河寺を去ったのとは違い、粉河寺でしばらく滞在してから京に帰る。帰る間に狭衣との旅の同行を許されなかった「さるべき若上達部、殿上人」らが

遅らかせたまひてける恨めしさの代わりに、我も我もと競ひ出でて、吉野川の所なきまで、心あわたたしくなりぬれば

と、京から大勢で狭衣を迎えにやってくる。粉河寺近くまで迎えに来たのだから「紀の川」であろうが、ここでも「吉野川」としている。新全集本頭注はここでの「吉野川」について、「歌枕として知られた「吉野川」の呼称を紀ノ川まで及ぼしているか」としてはいるものの、この「吉野川」も地理的な状況を踏まえると「紀の川」としてよく、ここでも作者はなぜか「紀の川」を「吉野川」としようとしている。

頼通と同様に狭衣も再び舟に乗って京から迎えにやって来た上達部たちと粉河寺を出て、

權かい しづくの雫のしほどけさも知らずに、手づから漕こぎかへりつつ、声はをかしうて、「あはれ、妹背山いもせやま、さはれ」と歌たはぶひ戯るるさまも、各々誇りかに、思ふことなげなるは、我ばかり物思はしきはなきなめりと、うらやましく思ひわたされたまふ。

行き帰り心まどはず妹背山思ひ離るる道を知らばや

寄る方のなかりけるも、契り心憂くながめ入りて、舟のはたに寄りかかりて眠りたまへる御まみの、なまめかしうめでたう見えたまふを、もの好ましげなる若上達部わかかんだちめなどは、めどたうのみ見たてまつるに、言こと少なにしづまりたまひて、もの心細げなる御けしきを、なほいかなる御心うちの中にかと、安やすの川原かはらの千鳥にも、問はまほしかりける。

と、粉河寺詣の場面は閉じられる。

こうして比較してみると、共通することもあれば多少の違いも見られたが、注意すべきは帰京のルートが大きく違っている点にある。頼通が「紀の川」を下って帰京したのに対して、狭衣は帰り路に再び「妹背山」を通過していることから、狭衣は「紀の川」を遡っていったのだ。狭衣は父堀川大臣に高野山へも行くが「音に聞く」名所へも回ると述べていた。粉河寺も確かに名所と言えは名所なのだが、観光をして心を楽しませくつろげる地としては不向きであ

ろう。頼通が紀の川を下って訪れた和歌の浦や吹上の浜はまさしく紀伊国を代表する名所である。平安当時誰もが名所として認める和歌の浦や吹上の浜には狭衣を立ち寄せず、狭衣に再び紀の川を遡って京に戻らせた作者の意図はどこにあったのか。

おそらく作者は行きと帰りの二度にわたって同じ場面に「妹背山」を物語に登場させることでより一層物語の中で「妹背山」の存在感が引き立つような印象を読者に与えようとしたのではなかろうか。しかも地理的な状況から紀の川でありながら紀の川とせずに「吉野川」とすることで、妹背山が「紀の川の妹背山」ではなく、「吉野川の妹背山」であるとしておきたかったのであろう。さらに何度も「吉野川」とすることで妹背山が「吉野川の妹背山」であることを強調しておきたかったのだらう。では作者が強調する「吉野川の妹背山」とは一体どういうものであるのか。

3. 紀の川と吉野川と妹背山

まず、はじめに「吉野川の妹背山」について考える前に、吉野川と紀の川、妹背山そのものについてそれぞれ確認しておきたい。

紀の川について国土交通省では公式のウェブサイト¹¹⁾に、

紀の川は、日本最多雨地帯の大台ヶ原を水源として、紀伊半島の中央部を貫流し、高見川、大和丹生川、紀伊丹生川、貴志川等を合わせ紀伊平野を経たのち、紀伊水道に注ぐ、幹川流路延長一三六km、流域面積一、七五〇km²の一級河川です。

としている。奈良県を流れていた吉野川が和歌山県に入ると、紀の川と呼び名が変わると一般的にはされているのだが、国土交通省によれば吉野川は、奈良県側では水系名「紀の川」で統一している。実際、奈良県側では「吉野川」を表示する看板などには「きのかわ」を併記している。現在において行政上「吉野川」は「紀の川」ということになる。

過去においてはどうかであろうか。寛弘元(1004年)年の太政官符「太政官符紀伊国司 雜事 貳箇條 一應_下寺家地與_二中納言平郷所領庄_二四至内髓令_レ住_中^(注カ) 進山地田畠_上事」に、

四至東限大日本國堺川、今案所謂丹生川、南限阿帝川南横峯、西限應神山谷、今案所謂星川神勾谷、北限吉野川¹²⁾、

とあり、丹生川とは和歌山県伊都郡九度山町を流れ、阿帝川とは和歌山県有田郡有田川町にあった地名で、星川神勾谷とは現在も和歌山県伊都郡かつらぎ町にその地名が残っている。したがって「北限吉野川」の「吉野川」とは「紀の川」ということになる。もう一つ、永承4

(1049)年の太政官符「太政官符民部省 應以金剛峯寺領田相傳寺家政所前田并荒野永免除租稅官物雜役事」にも、

今申請伊都郡荒野見作 四至 東限大杏東谷 南限吉野川 西限嵯峨谷 北限大山¹³⁾

とあり、これらの史料からすると平安時代の「紀の川」は行政上「吉野川」であったと少なくとも考えてよいだろう。ただ永承4年は頼通が高野山を参詣した翌年のことで、『宇治関白高野山御参詣記』では「木御川」としていたことに一定の疑問は残るが、今後の課題としたい。加えてさらに時代を下ってしまうが、天正13(1585)年に豊臣秀吉が現在のJR和歌山駅付近にあった太田城を水攻めにした時の史料が多く残されており、その中でも、戦国期紀伊国の国人領主の代表格である湯河氏¹⁴⁾の記録『湯川記』に、

同月太田ノ城を取巻テ、三方ニ堤ヲ築キ、吉野川ヲセキ懸テ水責ニゾシ給ヒケル¹⁵⁾

とあり、地元の人々が「紀の川」のことを江戸時代の前くらいまでは「吉野川」と呼んでいたことがわかる史料も残されている。つまり昔の「紀の川」は「吉野川」でもあったのだ。公文書である太政官符やそのほかの資料に「紀の川」が「吉野川」と記されていたことは、「吉野川の妹背山」について考える上で重要な問題になることに間違いなからう。

では「妹背山」についてはどうであろうか。村瀬憲夫氏は「妹背山」について、『日本書紀』の「大化の改新の詔」に書かれた「凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来」から、『万葉集』の「妹背山」の古い和歌では元々「背山」単独で詠まれ、「妹山」は無かったとされ、『万葉集』巻3・285番歌¹⁶⁾、丹比真人笠麻呂と286番歌、春日蔵首老の

紀伊国に往き、勢能山を越ゆる時に作る歌一首

たくひれのかけまく欲しき妹の名をこの勢能山にかけばいかにあらむ (285番歌)

即ち和ふる歌一首

宜しなへ我が背の君が負ひ来にしこの背の山を妹とは呼ばじ (286番歌)

を引いて、「この二人のやりとりからは、『セノヤマ』の『セ』に『背』を思い、それにもなって『妹』が連想されていることがわかる。」とされ、さらに、「もちろんいつごろから妹山が存在したのかわからない。が、神亀元年の紀伊行幸の折には、宮廷歌人笠金村が『紀伊の国の妹背山』(巻四一五四四)と詠むまでに、公認された存在となっているのである¹⁷⁾。」と説明される。

『万葉集』で公認された「紀伊の国の妹背山」の和歌は、笠金村の巻4・544番歌、

後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを (544番歌)

を含め『万葉集』に15首が確認される。その内「紀の川」を一緒に詠んだ和歌は、

人ならば母の愛子ぞあさもよし紀の川の辺の妹と背の山 (1209番歌)

の一首のみで、「紀の川」が単独で詠まれた和歌も『万葉集』の中ではこの1首だけである。「紀の川」を和歌に詠んだ『万葉集』以外の古い他の例は、『風土記』の「手束弓」説話を引用したと思われる『俊頼髓脳』や『今昔物語集』巻30「人妻化成弓後成鳥飛失語第14」などに引かれた、

あさもよひきの河ゆすりゆく水のいづさやむさやくるさやむさや

(『俊頼髓脳』216番歌・『今昔物語集』171番歌)

の一首以外に見当たらない。

一方、「吉野川」を詠んだ和歌は『万葉集』に、

吉野川行く瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも (119番歌)

八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ (430番歌)

とあり、短歌、長歌をあわせ15首ある。ちなみに「吉野川」と「妹背山」とを一緒に詠んだ和歌は『万葉集』には一つも無い。

ところが平安時代になって『古今和歌集』巻5・828番歌・よみ人知らずに、

流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のみしや世の中 (『古今和歌集』828番歌)

とあり、「吉野川」と「妹背山」が一つの和歌に詠んだものが登場する。他に平安初期と思われる例として『篁集』の、

中にゆく吉野の川はあせななむ妹背の山を越えて見るべく (『篁集』1番歌)

などがある。『古今和歌集』828番歌が登場して以降、万葉の時代に「紀伊の国の妹背山」として公認されていた「妹背山」は「吉野川の妹背山」として認識されるようになっていく。それとともなって妹背山が紀伊か大和かの論争を引き起こすことにもなる。その「吉野川の妹背山」となったきっかけをつくり、『狭衣物語』の作者に影響を与えたと思われる『古今和歌集』828番歌とはどのような和歌なのか、「妹背山」に視点を置いて見てみることにしたい。

4. 「紀の川の妹背山」と「吉野川の妹背山」

まず『古今和歌集』828番歌そのもの通釈や意味について、一般的で代表的な『古今和歌集』の注釈書と思われる新全集本を中心に、いくつかの主な現代の注釈書とを併せて参照しよう。なお、参考とする注釈書は松田武夫氏の『新釈古今和歌集』、竹岡正夫氏の『古今和歌集全評

積』、片桐洋一氏の『古今和歌集全評釈』を用いる¹⁸⁾ことにしたい。

『古今和歌集』828番歌の口語訳を新全集本では、

とどのつまり最後は妹山・背山の間に割り込んで激しく流れ落ちてくる吉野川よ。えい、ままよ。仕方がない。男と女の世界というものは、こんなものよ。

としている。新全集本と他の注釈本の口語訳に大きな差は見られない。「妹背山」の具体的な説明について新全集本では、「吉野川（→一二四題詞）の下流、紀ノ川の両岸で向かい合っている妹山と背山。」としている。「吉野川」と詠んではいるが「妹背山」は紀伊国にあるとしたいのだろう。

松田武夫氏の「妹背山」についての見解は、「この二つの山は、紀の川（吉野川の下流）を隔てて向かい合っている。」とし、契沖の『古今余材』に、

紀の川を隔てて背の山は北に、妹の山は南にあり。紀の川はよしの川の末の、紀国に
いりての名なり。もとはよし野川なる故に、よしや世の中といはんために、水上の名を
いひて上にながれてはといひつれば、ことわりたがはず。

とあるのを引いて契沖の説明が正しいとし、さらに、『古今和歌集打聴』の、

妹山は大和に在て、勢山は紀の国に在、其の中を流るゝ川を大和にしてはよしの川と
よび云々

とあるのを誤りとする。

竹岡正夫氏は古注などを引きながら828番歌自体について「いずれにしても難解な歌である」とされ、「妹背山」については、「『妹背山』は二カ所あり、吉野町宮滝の西、上市町の東に吉野河を挟んで相対する丘陵（北峰が妹山・下流に西に背山）をいう場合と、下流の紀の川を挟んである右岸の背の山（和歌山県伊都郡かつらぎ町）・左岸の妹山（同町西洪谷）をいう場合とがある。ここは後者をいう」とされる。

片桐洋一氏は「妹背山」について、「普通は『万葉集』巻七・一二〇九の『紀の川の^{いも}辺の妹と背^せの山』などに従って、吉野川の下流の紀の川の両岸にある妹山と背山（和歌山県伊都郡かつらぎ町）をあてるが、現在の吉野町宮滝の西、上市の東に吉野川を挟んで立つ二つの山のこととする説もある。『落つる』は、激しく流れ落ちる場合にいうので、山に近い後者の方がよいかもしいない。」とし、続けて、「『流れては妹背の山の中におつる』ものは、実は『泣かれては妹背の山の中に落つる涙』であったこと、そして『落つる』にふさわしいのは、『妹背の山の仲を隔てる吉野河』というよりも、『吉野の河のたきつ瀬』（恋三・六七三）と詠まれ、

『吉野河岩浪高く行く水の』(恋一・四七一)と詠まれた『激しく流れる吉野河』ではなかろうか。『紀の河』ではなく、流れが早く『たきつ瀬』もある、あの『吉野河』のイメージで詠まれているとすれば、『万葉集』の『妹山』、『背山』にこだわる必要もないのではないかとし、さらに続けて、「得られなかった恋を悲しむ涙を吉野川の激流のように『落とし』、『妹山』と『背山』の中を流れて行く心象風景によって恋部五巻を結ぶ『古今集』のこの方法は、まさしく圧倒的に見事なものであったことが納得されてくる。そして、ここに至れば『妹山』と『背山』は、もはや何処にあってもよい、象徴的な山として鑑賞されるはずである。」とされる。

前出の太政官符の史料に諸氏は触れられていないが、『古今和歌集』828番歌が現地詠だった可能性も捨てきれない。これについては今後の研究を待つことにしたい。

さて片桐氏は「妹背山」を「象徴的な山」と指摘しているが、『古今和歌集』828番歌が和歌の世界に登場し「恋5」に取められて以降、「妹背山」は夫婦の仲であるにしる兄妹の仲であるにしる「男女の仲を象徴する山」¹⁹⁾となる。

万葉の時代に、「旅びとの家郷への思い」を象徴していた妹背山は、

むつまじき妹背の山の中にさへ隔てつる雲の晴れずもあるかな (『後撰集和歌』1214番歌)

むつまじき妹背の山としらねばやはつ秋ぎりの立ちへだつらん (『拾遺和歌集』1095番歌) など、「紀の川」や「吉野川」と分離し、「妹背山」は単独で詠まれるようになり、『枕草子』や『源氏物語』などの散文にも取り上げられ、『狭衣物語』に至る。

平安時代に妹背山は男女の仲を象徴する山となった一方で、『源道濟集』に、「妹背山。旅人、紅葉を見る」と題して、

妹背山旅人紅葉ば紅の袖ふりかはし行くかとぞ見る (『源道濟集』200番歌)

と、妹背山が紅葉とともに詠まれた和歌もあり、紅葉の名所にもなっていったようだ。『狭衣物語』や『宇治関白高野山御参詣記』の妹背山で紅葉が話題になったのも「妹背山」が紅葉の名所として知られていたからであろう。

ところで吉野川は平安時代に入っても、

吉野川岸の山吹吹く風にそこの影さへうつろひにけり

(『古今和歌集』巻2・紀貫之・124番歌)

花ざかりまだもすぎぬに吉野川影にうつろふ岸の山吹 (『後撰和歌集』巻3・121番歌)

など、和歌に詠まれ続けていたが、紀の川は三代集の時代には詠まれることがなく、

別れにし手束の弓の白鳥を紀のはゆすりこひぬひぞなき (『散木奇歌集』1201番歌)

や、

思ふには契もなにかあさもよひ紀の川かみの白鳥の関 (『夫木抄』9600番歌)

と、院政期に入ってからやっと「紀の川」の和歌が再び見られるようになる。しかしながら、いずれも「手束弓」や「白鳥の関」、「あさもよひ」などといった『万葉集』や『風土記』の「手束弓」説話のことと一緒に詠まれたもので、どうしても前時代的なイメージが付き纏ってしまう。阿仏尼が、

五月雨に紀の川なみの早き瀬も神のしるへの舟はさはらず

(『安嘉門院四条五百首』35番歌)

と詠み、藤原長綱が、

秋深き紀の川かみやしぐるらんともにつらなる水のしらなみ (『長綱集』424番歌)

と詠んだりしたことで、ようやく鎌倉時代に入り『万葉集』や『風土記』から距離を置いた和歌も詠まれるようになった。ただまだ、

今朝よりは行く瀬の水もあさもよひ紀の川上か氷りしぬらむ (『建保歌合』160番歌)

こほりけり春の日数の朝もよひ紀の川浪も音むすぶまで (『雅世集』548番歌)

と、飛鳥井雅世が活躍した室町時代に至っても、「紀の川」といえば「あさもよひ」と固定化されてしまっているようにも思える。結局「紀の川」は和歌の世界で固定化された万葉のイメージを払拭しきれず、和歌の素材として詠まれる機会も少なくなってしまったのではないか。

『宇治関白高野山御参詣記』では紀の川(木御川)と明記され、粉河寺の近くに流れている川が地理的な状況から紀の川であるにもかかわらず、『狭衣物語』の作者が「吉野川」と表記した理由は、妹背山が「紀の川」と結びついてしまうことで、旅びとの家郷への思いを象徴する「紀伊の国の妹背山」を読者に想起させてしまうことを避けて男女の仲を象徴する「吉野川の妹背山」としての妹背山を選択したかったのであろう。

ではなぜ狭衣に行きと帰りの行程を同じにしてまで二度も妹背山を登場させ、その存在感を物語の中で強調しようとしたのか。

5. 『狭衣物語』の妹背山

狭衣は粉河寺で本尊の普賢菩薩の光を見るという奇跡に遭遇する。父堀川大臣に出家はしな

いと約束したものの、出家願望が強い狭衣は、粉河寺で奇跡を体験したことで父堀川大臣を出し抜いて出家する展開となってもよかったはずだ。しかしこの後、飛鳥井の女君の兄と出会うことで、飛鳥井の女君への思いを募らせながら出家せずそのまま粉河寺を離れることになる。狭衣が京に向けて粉河寺を出発して妹背山を通過する時に、

行き帰り心まどはす妹背山思ひ離るる道を知らばや

と詠んだが、『狭衣物語』の中で妹背山は男女の仲を裁ちきれず出家できないこの世への「未練」の山として意味を持つことになる。そして狭衣を「行き帰り心まどは」せた「妹背山」は二度も同じ粉河寺詣の場面に登場したことで、狭衣の未練の象徴として強調され読者の印象に残るよう描かれたとしてよいだろう。

物語全体を見渡したとき、粉河寺詣の後も狭衣は何度も出家を望むものの果たせなかったことを考えれば、物語の半ばに狭衣の恋に対する未練の象徴としての「妹背山」が登場してくることは大きな意味を持つことになるのではないか。

注

- 1) 本稿で用いた本文は深川本を底本にした『新編日本古典文学全集29狭衣物語1』、小学館、1999年、429p. と『新編日本古典文学全集30狭衣物語2』、小学館、2001年、429p. の本文を用い、以下新全集本の語を用いる。なお周知のごとく『狭衣物語』の本文に異同が多いが必要に応じて他の本文を用いることにしたい。
- 2) 「紀の川」の「の」の表記について、和歌山県 県土整備部河川・下水道局河川課によると、昭和40(1965)年に河川法で紀の川が一級河川に指定されたことにより、それまでは公文書でも「紀ノ川」、「紀の川」と混在して記載されていたが、「紀の川」に統一された。よって本稿も「紀の川」を用いる。
- 3) 『新潮日本古典集成第68回狭衣物語上』、新潮社、1985年、p3の「凡例」による。
- 4) 『日本古典文学大系79狭衣物語』、岩波書店、1965年、p23の「凡例」による。
- 5) 山本智教、1982年、「高野政所・慈尊院の歴史」、『密教文化104号』、密教研究会、p1による。
- 6) 「慈尊院」、『和歌山県の地名日本歴史地名大系31』、平凡社、1983年、p115による。なお、続けて「弘法大師が高野山上の地理・気象条件を勘案して、高野山麓の『家多村』に政所を建て、そこに聖教・仏具・修理料などを納め置くことにしたという。」と説明している。

- 7) 『狭衣物語』と『宇治関白高野山御参詣記』との関係について、既に戦前の研究があり、堀部正二「狭衣考證 — その作者と著作年代時代 —」、1943年、『中古日本文学の研究』、教育図書出版会社、465p や宮田和一郎「狭衣物語」、1943年、『物語文学攷（平安時代）物語文学研究叢書第18』、文進堂、375p がある。近年の頼通時代の文学については、久下裕利編、『考えるシリーズ4 源氏以降の物語を考える — 継承の構図』、武蔵野書院、2012年、248p や和田律子・久下裕利編、『考えるシリーズII③知の挑戦 平安後期 頼通文化世界を考える — 成熟の行方』、武蔵野書院、2016年、480p がある。特に『狭衣物語』と『宇治関白高野山御参詣記』との関係について、和田律子・久下裕利編、『考えるシリーズII③知の挑戦 平安後期頼通文化世界を考える — 成熟の行方』、武蔵野書院、2016年、480p には西本寮子「『狭衣物語』にみる頼通の時代」、有馬義貴「創作物としての物語 — 『狭衣物語』の同時代性をめぐって —」の論考が収められている。
- 8) 『宇治関白高野山御参詣記』の本文には、いわゆる群書類従本（『続々群書類従第5』、続群書類従完成会、1969年、p268-p275）や『和歌山県史』（『和歌山県史古代史料1』、和歌山県、1981年、p549-p556）に収められていた本文が主にこれまで用いられてきたが、末松剛氏によると、『宇治関白高野山御参詣記』の中で「観智院本Bは現在所在が明らかな参詣記のなかで、もっとも重要な写本」（末松剛、2009年3月、「『宇治関白高野山御参詣記』（京都府立総合資料館本）の紹介と諸本について」、『鳳翔学叢 第5輯』、平等院、p32）とされ、本稿も末松氏による『観智院本B』を翻刻した本文を用いた。
- 9) 小倉久美子、2010年3月、『宇治関白高野山御参詣記』にみる風景』、『鳳翔学叢第6輯』、平等院、p51 による。
- 10) 『角川日本地名大辞典 CD-ROM 版』、角川書店、2002年、による。
- 11) 国土交通省ウェブサイト「紀の川 日本の川 近畿の一級河川」、2008年による。
https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0604_kinokawa/0604_kinokawa_00.html
2016年に4月1日に定められた国土交通省ウェブサイト「リンク・著作権・免責事項」の本利用のルールに従って引用した。
- 12) 同じ史料が『和歌山県史古代史料1』、和歌山県、1981年、p474 にもあるが、『和歌山県史』が『弘法大師全集』を引用しているため、本稿では本文を「金剛峯寺雑文」、『弘法大師傳全集復刻巻2』、株式会社ピタカ、1977年、p21 によった。

- 13) 同じ史料が『和歌山県史古代史料1』、和歌山県、1981年、p582にもあるが、『和歌山県史』が『大日本古文書』を引用しているため、本稿では本文を「又續寶簡集88『大日本古文書 家わけ第1ノ7』、東京大學出版會、1968年、p262によった。
- 14) 弓倉弘年、2006年、「戦国期紀州湯河氏の動向」、『中世後期畿内近国守護の研究』、清文堂出版、p197によると、湯河氏は紀南地域を活動の中心としていたということである。豊臣秀吉の太田城攻めで「吉野川」の水を利用したとしているものは『湯川記』の他、『増補筒井家記』、『松井家譜』、『戸川記』などもある。
- 15) 本文は『大日本史料復刻版第11編之14冊』、東京大學出版會、1989年、p305によった。
- 16) 『万葉集』の歌番号は『旧国歌大観』による。なお、本稿で引用した和歌について『万葉集』、勅撰和歌集、歌合、『俊頼髓脳』、『今昔物語集』の和歌の本文は『新編国歌大観 CD-ROM』、角川書店、1996年により、私家集の和歌は『新編私家集大成：CD-ROM版』、エムワイ企画、2008年をそれぞれ用い、稿者が私的に旧字体を新字体に、平仮名を漢字に改め送り仮名を施した。
- 17) 村瀬憲夫氏は「旅心」、1986年、『万葉の歌 人と風土 和歌山』、保育社、p93で妹背山が「紀伊の国の妹背山」と公認されたと述べられていたが、「万葉集の背山・妹山：吉野の妹山・背山をめぐる」2007年、『文学・芸術・文化：近畿大学文学部論集 = Bulletin of the School of Literature, Arts and Cultural Studies, KinkiUniversity 18(2), 1-15』では、「万葉集には背山・妹山を詠んだ歌が十五首収められている。いずれも紀伊国の背山・妹山（和歌山県伊都郡かつらぎ町）を詠んだ歌」とされる。
- 18) 松田武夫『新釈古今和歌集下』、風間書房、1968年、p497、竹岡正夫『古今和歌集全評釈下』右文書院、1976年、p565、p566、片桐洋一『古今和歌集全評釈中』、講談社、1998年、p985にそれぞれよった。
- 19) 『新日本古典文学大系5 古今和歌集』、岩波書店、1989年、p248の828番歌の脚注では妹背山を「男女の仲の比喩表現」とし、妹背山がどこにあるかは触れていない。

引用文献・資料

『新編日本古典文学全集29狭衣物語1』、小学館、1999年、p292-p296

『新編日本古典文学全集30狭衣物語2』、小学館、2001年、p20

『新編国歌大観 CD-ROM』、角川書店、1996年

- 『角川日本地名大辞典 CD-ROM 版』、角川書店、2002年
- 『新編私家集大成：CD-ROM 版』、エムワイ企画、2008年
- 『続々群書類従第5』、続群書類従完成会、1969年、p268-p275
- 『弘法大師全集復刻巻2』、株式会社タピカ、1977年、p21
- 『大日本古文書家わけ第1の7』、東京大學出版會、1968年、p262
- 『大日本史料復刻版第11編之14冊』、東京大學出版會、1989年、p305
- 『和歌山県の地名日本歴史地名大系31』平凡社、1983年、p115
- 松田武夫、『新釈古今和歌集下』、風間書房、1968年、p497
- 竹岡正夫、『古今和歌集全評釈下』、右文書院、1976年、p565、p566
- 片桐洋一、『古今和歌集全評釈中』、講談社、1998年、p985
- 末松剛、2009年3月、『『宇治関白高野山御参詣記』（京都府立総合資料館本）の紹介と諸本について』、『鳳翔学叢第5輯』、平等院、p44
- 国土交通省ウェブサイト「紀の川 日本の川 近畿の一級河川」2008年
https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0604_kinokawa/0604_kinokawa_00.html

参考文献・史料

- 『新編日本古典文学全集29狭衣物語1』、小学館、1999年、434p.
- 『新編日本古典文学全集30狭衣物語2』、小学館、2001年、434p.
- 『日本古典文学大系79狭衣物語』岩波書店、1965年、544p.
- 『新潮日本古典集成第68回狭衣物語上』、新潮社、1985年、294p.
- 『新潮日本古典集成第74回狭衣物語下』、新潮社、1986年、440p.
- 『新編日本古典文学全集11古今和歌集』、小学館、1994年、p312
- 『新編日本古典文学全集87歌論集』、小学館、2001年、p102-p103
- 『新編日本古典文学全集38今昔物語集4』小学館、2002年、p473-p475
- 『新編日本古典文学全集5 風土紀』小学館、1997年、p583-p584
- 『新日本古典文学大系5 古今和歌集』、岩波書店、1989年、p248
- 『和歌山県史古代史料1』、和歌山県、1981年、934p.
- 『契沖全集第8巻』、岩波書店、1973年、730p.

『賀茂真淵全集第9巻』、続群書類従完成会、1985年、471p.

弓倉弘年、『中世後期畿内近国守護の研究』、清文堂出版、2006年、428p.

久下裕利編、『考えるシリーズ4 源氏以降の物語を考える－継承の構図』、武蔵野書、2012年、248p

和田律子・久下裕利編、『考えるシリーズII③知の挑戦 平安後期 頼通文化世界を考える－成熟の行方』、武蔵野書院、2016年、480p

村瀬憲夫、『万葉の歌 人と風土 和歌山』、保育社、1986年、218p.

片桐洋一、『歌枕 歌ことば辞典増訂版』、笠間書院、1999年、598p

山本智教氏、1982年12月「高野政所・慈尊院の歴史」、『密教文化104号』、密教研究会

小倉久美子、2010年3月、『宇治関白高野山御参詣記』にみる風景』、『鳳翔学叢第六輯』、平等院

村瀬憲夫、2007年3月、「万葉集の背山・妹山：吉野の妹山・背山をめぐって」、『文学・芸術・文化：近畿大学文学部論集 = Bulletin of the School of Literature, Arts and Cultural Studies, KinkiUniversity 18(2), 1-15』